

編部會社・聞新民國

特222

情鬼は躍る

176



\* 0039953000 \*

0039953-000

特222-176

情鬼は躍る

国民新聞社会部・編

国民新聞社

昭和11

AGI

10 Ser

3  
14

行發社聞新民國



序

犯罪に関する著述は、非常に多いのだが、正史と云ふものが少い。犯罪の正史と云へば、何と云つても裁判である。最近裁判を取扱つた劇や映画が、社會の慾求に應じて多くなつたが、裁判小説なり裁判實録と云つた著作物は、ほとんど絶無と云つていい。

裁判と云へば、我々の生活に最も重大な事柄でありながら、頗るかた苦しい窮屈なものに感じられて、一つの資料となつても、一般大衆に愛讀されない。

法廷秘話『情鬼は躍る』は數多い犯罪の中から、社會と最も關係の深い事件のみを取上げ、然も極めて平易に表現し、裁判資料として提供したもので、世相の推移、裁判を通じて見る人心の動き等を





知る上に絶好の讀物だと思ふ。  
 従つて、本書は單なる讀物ではなく、公判廷からの中繼放送であり、又「こうした罪を犯せばこうした處罰を受けるものだ」と云ふ事が、面白く讀んでいただければ幸甚である。

昭和十一年・秋

著者

# 「情鬼は躍る」目次

情鬼は躍る……………一  
 プロローグ—好色外人—銀座裏の女給—女の欲望  
 小さな國際問題—運命の皮肉—女の作戦—墮胎魔就縛

生きる悲哀……………三三  
 深夜の異變—寢室の悲劇—この入屋め—嘉助の忠言  
 親友の絆—心の闇路—絶望—血に狂ふ

原宿女中殺し……………三三  
 石部金吉—色里通ひ—遊廓の旋風—獨立自營  
 藝妓屋の女將—間違ひの因—激怒—眼みは深し

改悛の涙……………三三  
 映畫狂の被告—審理は進む—母は泣く—法廷美談



## 弱者の悲しみ

三九

紺屋高尾—貯金で落籍—易者の言葉—妻は不審  
夫婦喧嘩—夫は刑務所へ

## 人情裁判

四七

控訴院の法廷—失業と出産—夫婦の相談—大膽な泥棒  
午前二時—心臓は強い—犯人は夫婦者—法に涙あり

# 情鬼は躍る

國民新聞社會部編

## 情鬼は躍る

### プロローグ

謹んで一筆申し上げます、御署管内に住むロセフスキーは、素行不良の外国人で、彼のために、毒牙にかゝつた女性が多勢あります、私も、ロセフスキーのために、一生を憂無しにされて、泣いてゐる女の一人であります。

彼のやうな不良外人がゐては、私と同じやうな運命に泣く日本女性

情鬼は躍る

性が、どん／＼殖えるものと思ひますから、どうぞ、警察の力で、嚴罰に處して下さい。お願い致します。

不良外人に泣かされた女より署長さま御許に

水室の跡もなまめかしい手紙が署長宛に届けられると、署長は、直ちに、司法主任を呼んだ。

「この手紙ぢやが、不良外人の毒牙にかゝつた女らしい。何かの参

考になると思ふから、讀んで見て呉れ給へ」

「は、なるほど女文字ですな」

司法主任が讀んでしまふと、署長は、徐ろに、口を開いた。

「どうだね、その外人の名を、聞いたことがあるかね」

「は、一向に存じませんが……」

「さうかね、僕は二、三度噂を聞いたことがある。なか／＼の發展家らしい」

「さうですか。汗瀧で相すみません、今後は十分に——」



「謝るには及ばんよ、ヨタレニと云ふ金髪美人を知つてゐるかね」

「は、あの女なら知つてゐます。パリス洋装店のマダムです」

「この手紙の主人公は、ヨタレニの夫だよ、内偵して見給へ、案外面白いネタがあるかも知れんよ」

「早速、調べて見ます」

「さうして呉れ給へ、この手紙は君の手に――」

「は」

司法主任は、署長宛の手紙を持つて、引下つた。室へ歸ると、飛車部屋にゐた東藤刑事を呼び

「ロセフスキーと云ふ外國人を知つてゐるかね」

「ロセフスキー? 拳闘選手でありますか」

「あの女の亭主らしいんだが、相好の色障らしい。泣いてゐる女もいらしいから、裏行を洗つて貰



ひたいのだ、いゝかね」

「承知いたしました」

「これが参考だよ」

「は」

東藤刑事は、手紙を受取つて、緊張した。

好色外人

ロセフスキーは、妻のヨタレニを伴ひ、はる／＼渡日して来た白

卒露人で、東京へ来て、パリス洋装店を出してから、そろ／＼四年

にならうとしてゐる。

妻のヨタレニが、日本人職のう

はさに上るほど、美しい女であつ

たにも拘らず、ロセフスキーは大

變な道楽者で、婦人問題のゴタゴ

タが絶えなかつた。

それも、同國人、或は外國婦人

（黙つたのか知らし）

さう思つてゐると、ガラ／＼と、物を投げる音がした。壊れる音もした。

「どうしたのですか、何をしてゐるのですか」

ヨタレニが、店先へ飛出して見ると、早苗が、取亂した姿で、店內の品物を手當り次第に、投げつけてゐた。ロセフスキーが云ひやうのない醜い姿で、早苗の抵抗を避けてゐる。

「畜生、大事なお客さまに、何と云ふ失禮な事をするのです。この排々おやちい」

ヨタレニは狂人のやうに、ロセフスキーに挑みかゝつて行つたが、彼女が正に死物狂ひである。

三

との間に起るのなら、まだく我儘も出来るのだが、土地ッ兒の日本婦人を誘惑するのだから

「ロセフスキーは不良外人だ、あんな店に出入してはいけない」

と得意先でも警戒するやうになるし、パリス洋装店は、かうした關係上、店が古くなればなる程、寂れて行つた。

（ロシアから日本までやつて来たんだ、食へる間は、ちつと、辛抱しよう）

ヨタレニは、来る夜も枕の乾く時とてなかつたが、異郷の空と云ふ事を考へて、夫の亂行を見ぬ振りをしてゐた。ロセフスキーは、妻のさうした態度を、いゝこととして遊んでゐた。

悪鬼は出る

店はいよく寂れるし、不良外人一掃の聲は、頻發する外國人の戀愛沙汰で、喧しくなつた。

「何とかしなければ、この店も駄目になる。夫でもゐなかつたら、自分に對する同情が、信用になることもあるだらうが――」

ヨタレニは、憤悶した。ロセフスキーに、苦衷を訴へたが

「なきことは止しなさい」

と、言下に一蹴され、吐り飛ばされた。ヨタレニは悲觀した。

その翌日、ヨタレニが産所で働いてゐるところへ、パリス洋装店に取つては、大得意ともなつてゐる秋野早苗が訪ねて来た。夫のロセフスキーが應對してゐたが、間もなく、靜かになつた。

三

「畜生、大事なお客さまに、何と云ふ失禮な事をするのです。この排々おやちい」

ヨタレニは狂人のやうに、ロセフスキーに挑みかゝつて行つたが、彼女が正に死物狂ひである。

三

悪鬼は出る



銀座裏の女給

妻のヨタレニは、夫のロセフスキーに愛想をつかし、

「あなたと一緒にゐては、お顧客が減るばかりですから、當分別々に暮して下さい」

と、固い決意を眉宇に、ロセフスキーに詰め寄つた。

醜い場面を、ヨタレニのために察見されたので、ロセフスキーもふくれてゐた。

「彫居すると云ふなら、こんな結構な事はない。今日只今から出て行つてやる！」

「さうして下さい。お互のためです」

「ふん、ウンと浮氣をして、不良外人と云はれた上、歐外に追放さ

れろ」

ロセフスキーは、口汚く罵倒した後、パリス洋装店を飛出してしまつた。

（その中に、夫の眼も覚めるだらう）

ヨタレニは、淋しい心を慰めながら、仕事に精出した。ヨタレニの心を、天もあはれに思つたか、パリス洋装店は、日と共に繁昌して行つた。

（夫が改心して、ひよつこり歸つて来てくれたなら！）

店が繁昌すると、ヨタレニは、家を出たロセフスキーのことを考へた。何時歸つて来ても、差支へないまでになつてゐる。

ヨタレニが、涙ぐましいほど、

邪怪な夫、ロセフスキーのことを考へてゐる時、ロセフスキーは銀座裏のアパートに住んで、相變らず、良くない仲間と遊び廻り、不良外人振りを發揮してゐた。

同じアパートに、花町るり子と云ふ女給が止んでゐた。婚期を過ぎた廿七、八の中年増で、カフェーからカフェーを流れてゐるだけに、どこか、エキゾチックな感じが深かつた。

「るり子さん、るり子さん」  
ロセフスキーは、朝夕のつれづれに、洗面所や廊下で鏡を合せるるり子が、たまたまなく好きになつた。口癖のやうにるり子の名前を呼んでゐたが、毛唐崇拜の奴の強い日本人に、この外人の態度

は、大きなシヨツタを投げた。

「るり子さん、あなたは金の不自由はなくなるわ、あの外人はあなたに夢中ですよ」

「いやよ、外人なんか真平だわ」

「あら、るりさんも近代性が無いのね、たまにはバタ臭い、犬のやうな男にぶつゝかつて御覽なさい。米の飯を食つてゐる黄色人がいやになるから——」

「さうかしら……」

「あなたが厭なら、妾が立候補するわ」

同じカフェーの女給かほるが、眼を睨くして、やに下つた。

女の欲望

かほるに、油をかけられたるり子は

情鬼は囃る

（西洋人は、そんなにいゝものか知ら……）

と、妙な欲望を、ロセフスキー



に感した。

その夜、ひどくいゝ機嫌で、るり子が歸つて来ると、どこで飲んだか、ロセフスキーはぐでんぐ

に歸つて歸つて来た。るり子は新しい好奇心にそゝられながら、ロセフスキーの、バタ臭い顔を見直した。ブルドックを思はせるやうな男で、その肥大した赤ッ鼻は、性慾そのものゝやうだつた。所謂二枚目型の美男子に、スツカリ魅力を感じなくなつてゐたるるり子は、

（ブルドックと、世間離れのした生活をするのも、面白いだらう）  
と、ロセフスキーの厚い唇に乳房のうづく思ひがした。  
「ちよいと異人さん、景氣がいと見えて、上機嫌ね」  
るり子かゝ髪をかけると、チヨツと意外さうな顔をしたロセフスキーが、



「るり子さん、あなたも今ですか  
一緒に寝ること、珍しい話ありま  
すね、乾杯々々、如何ありますか」

ロセフスキーは、ザクロのやう  
な口を開いて、酒臭い息を吹きな  
がら、大手をひろげて、るり子を  
抱いて来た。

「乾杯々々如何です、私の室  
あります、酒、ケーキ、何でもあ  
ります、舞臺走しませう、行きま  
せう」

「え、行くわ、大いに乾杯しま  
せう」

るり子は、ロセフスキーの脚に  
かへられたながら、彼の室へ這入  
つて行つた。凡ての調度品が、異  
色のなのが、今の生活にあきく  
してゐるるり子に取つて、満足

興へた。

「私、パヂヤマ着ます。るり子さ  
ん如何です」

「妾結構」

ロセフスキーは、黙つて、るり  
子の頬に、接吻した。パヂヤマに  
着換たロセフスキーは、ますます  
性的で、牛を思はせた。るり子  
は、急に怖くなつて、  
(黙つてしまはうか知ら……)

と思つた位だつた。

「さあ乾杯しませう」

「ブラボウ」

ロセフスキーとるり子は強  
洋酒で乾杯をつとけた。るり子は  
ぐでんぐになつてしまひ

「妾、もう駄目！」

と云ふと、ロセフスキーの突付

けたグラスをはねのけて、ベット  
にすべり込んでしまつた。

### 小さな国際問題

あの夜から数日経つと、るり子  
とロセフスキーの関係が、アペ  
ト中の評判となつた。ロセフスキ  
ーは、河馬を思はせるやうな容貌  
をしてゐる大男だし、るり子は、  
生活にも性的にも、疲勞困憊した  
と云ふやうな、瘦身の女であつた  
ので、二人の對照が又、アペ  
ートの日本人達を、

「へえ、あの女かね！」

と、驚歎させたものだ。

るり子は、こんな噂を知つてか  
知らずにか、いとも明らかに、ロ  
セフスキーの室を掃除してやつた

り、彼のシートを洗濯してやつた  
りしてゐた。るり子が洗濯をする  
なんて、近頃にないことであつた  
ので、服車のかはるまでが、舌を  
まいたにどだつた。

「るりちゃん、スツカリ出来てし  
まつたらやないの、ほほほ、男と  
女つて、をかしたもののね」

「全くだわ、毛唐なんか死んだつ  
て眞ッ平だと思つてゐた妾なん  
でせう、それが……」

「聞かせないでよ、惚氣を聞かせ  
る代りに、ウンと感謝して貰ひた  
いわ」

「感謝してゐるわよ、ロセフスキ  
ーだつて、毎日毎晩あなたのこと  
ばかり云つてゐるわ」

「あなたはどうなの？」

雪鬼は出る

「モチ、殺されたつて、悪く思は  
ないわ」

るり子のいけ圖々しいのに海干  
山干のかはるが、たちくととなつ  
て悲鳴を上げた。るり子はロセフ  
スキーに夢中なんである。

「ねえかほるさん。ロセフスキー  
がね、一緒に外國へ行かうと云つ  
てゐるのよ」

「外國もいろ／＼あるわ、あの毛  
唐ちゃん、アメリカやフランスへは  
行けさうにないわ、一體どこへ行  
かうつてのさ」

「まあ、あなたの言葉を聞いてゐ  
ると、妾達の仲を、妬いてゐた  
いだわ、ロセフスキーはね、妾次  
第だと云ふの、妾が上海と云へば  
上海、アメリカがいと云へばア

メリカへ行つていふの」

「ふーん、いゝ御身分だわ、然し  
ね、るりちゃん、妾はあなたの事  
を思ひすぎてゐたわ、粹も甘いも  
知つてゐるるりちゃんだと思つて  
ロセフスキーとの事をすゝめたの  
よ、あなたはロセフスキーに夢つ  
てゐるわ、毛唐に溺れ切つては駄  
目、此方でリードしなければ駄目  
よ」

「まあ、變な御説教ね、妾の事は  
妾でしますから、どうぞ御心配な  
く……」

るり子はツンとしてしまつた。  
かほるは呆れ返つたと云ふ風に出  
て行つたが、間もなく小さな國際  
問題が頭をもたげてきた。



### 運命の皮肉

るり子には、梶原五郎と云ふ情夫があつた。港街に集つてゐる有名な不良であつたが、酒の上が悪く、殺人罪で服役して四年餘になる。

「殺人犯人の情婦……」

さうした眼で見られるのが辛いので、るり子は、僅かな知己を頼つて上京、カフェーからカフェーを轉々して、銀座裏のアパートに居付いたのであつたが、銀座に来てから、そろ／＼二年にならうとしてゐる。

「五郎が刑務所から歸つて来たたら田舎へでも引込んで……」

しをらしい氣持で、刑務所に入る五郎の事を、わが事のやうに考へてゐる。

へてゐたのも、彼が下獄して一年足らずの間だつた。東京へ来てしまふと

「あんな不良を！」

と、急に、五郎に對して秋風を覺えるやうになつたし、彼女も若かつた。女給生活をしてゐるるり子を、世間の男達か、孤獨で置く筈がなかつた。

醉つた揚句、不圖泊り込んだ待合が、彼女の生活に大きな波紋を投げてしまひ

（え、まゝよ、一度汚れてしまつたものは、二度と、キレイにはならないのだ。五郎は五郎、妾は妾——）

と、るり子は、自分で自分の運命を開拓しようと思つた。

が、女一人の生活は巧く行かなかつた。

（五郎のために——）

と思ふ心があればこそ、今日までシツカリした生活かつつけられたが、いざ、自分一人になつて見ると

「結婚しよう」

と思つて身を任せた相手か、案外女蕩しの薄情者であつたり、口ほどに働きのない浪人者たつたりして、結局は、自分自身か馬鹿を見ただけだつた。

自分では、眞面目な女になりたといと、一生懸命になつてゐるのだが事志しと喚び違ひ、男から男へ渡り鳥の生活をするやうな、悲しい運命を辿つてしまつた。

そして、思つてもソツとするやうな、赤ツ鼻の異國人に——

「女ツて、一度失敗したら、永久に駄目さ」

自分で自分を諷めて、ロセフスキーとの生活に甘んじてゐるるり子の許に、ひよつこりと、變り果てた五郎が訪れたのだ。

「るり子、俺はするぶんだけ逃げたぜ、今の俺は、お前を頼る以外に、力になつてくれる者も、慰めてくれる女もゐないのだ」

見る影もない五郎は、哀感するやうにるり子に訴へるのだつた。

### 女の作戦

過去に於て、夫婦約束した五郎が、出獄した足でひよつこりるり

情鬼は囃る

子のアパートを訪ねて来たのには流石の流石なるり子もぎくりとした。

横濱で鳴らしたやくざの五郎が毛膚と乳輪合つてゐることを知つたら、それこそ、大變である。云はず語らずとも、結末は判つてゐるし、これは

（だますに限る）

と思つた。

「ねえ五郎さん、扉を閉めて此方へ来てよ、大事な話があるの」

「大事な話？」

出獄したばかりの五郎は、るり子の顔色を見ると、急に、狼狽して、扉を閉めた。

「ど、どんな話だ」

月歸りて困りました。

（五郎は来てゐないか、もう来てゐる筈だ。来てゐたら御用だから逃がすんぢやないぞ、いゝか）

「毎日々々警察の旦那が見えるので、横濱にも居られず、人目を避けて東京へ来たのよ、世間を狭く淋しい生活をして来たわ」

「そ、さうか。此處へ来てからは誰も尋ねて来なかつたかい」

「それが駄目なの、もう大丈夫だと思つてゐたのに、二、三日前に（五郎が来てゐるだらう、刑務所は出たのだし、此處より他に、行くあてはないのだ、来たなら知らせるんだ、いゝか）

と、土地の旦那が見えたわ、誰にも話さないのに、どうしてあんな



と妾の事が知れるんでせうね」  
「俺の生活がいけなかつたんだ、  
激怒して呉れ」

「妾の事はいい、それよか、あ  
なた身軽が危儀だわ、直ぐに他所  
の土地へ行つたがいと思ふのだ  
けど……」

「大阪へ行くよ、大阪には叔父が  
居るし、明日のおまんまを心配す  
るやうな事はない」

「大阪へ着いたら手紙を頂戴、妾  
も行くわ」

るり子は、ベッドの上に投げ出  
してあつたハンドバックの中から  
財布を盗み出し

「旅費は入つてゐるわ、持つて  
いらつしやい」

「すまねえな、會ふ早々金の無心

などして……」

「いゝわよ、二人の仲ちやありま  
せんか」

「有難う、では心が急ぐから、こ  
れで失敬するよ、着いたら直ぐ手  
紙を出す——」

五郎は、おびえるやうにアパー  
トを出て行つた。横濱時代の元氣  
さは、どこかへ素ッ飛んで、空ッ  
きし意氣地のなくなつた五郎を  
るり子は何がなし悲しい心で見送つ  
た。

### 墮胎魔就縛

五郎が大阪へ出發して、ホツと  
一息つく間もなく、るり子は、更  
に新しい機嫌に悶えねばならな  
かつた。

るり子は、ロセフスキーの嵐を  
宿して、妊娠してゐたのだ。ロセ  
フスキーに、この話をするよ、ロ  
セフスキーは

「出来たものは仕方がないから、  
腕のいゝ産婆さんに頼んで、出産  
するといふでせう」

と、出産をすゝめた。るり子は  
困つた。

（赤い毛、青い眼の子供が生れた  
ら、どうしよう）

るり子は、混血兒を生む恐怖を  
思つて、胸を抉られた。

「ね、ロセフスキー」

「まだ話ありますか」

「妾、子供は生めないのです、子  
供を生んだら、死んでしまいます  
身體が駄目なのです」

「それ、大いに困ります、どうい  
たしますか」

「ロセフスキー、お願ひです、生  
まないやうにして下さい」

「私、何とか考へませう、るり子  
のために……」

「ありがたう、ロセフスキー」  
るり子はホツとした。数日隠  
すると、ロセフスキーは

「るり子、私、るり子のために、  
立派な醫者を探しました。直ぐに  
行きますせう」

「まあ、醫者を」

「まあ、直ぐに行きますせう」

ロセフスキーは、るり子連れ  
てアパートを出たが、行つた先は  
日本橋の繁々たる産婦人科醫院だ  
つた。

情鬼は 6

かねてロセフスキーから囁かし  
てあつたと思えて、るり子は手紙  
宛に通された。一時産科院長と手



術室にゐたるり子は、血の氣の失  
せた蒼白顔をして、出て来た。  
「もう大丈夫だ、静かにしてい  
て下さい、手術が大切ですからね

いんですか」

院長が、るり子を攫けるやうに  
して、出て来た。ロセフスキーは  
「サンキユウ」

と、院長の手を握り、るり子を  
促して、アパートへ歸つたが、こ  
の事を、警察刑事が探査した。

るり子を留置して取調べると、  
彼女は素直に、墮胎の事實を認め  
たので、日本橋の産婦人科醫院を  
襲ひ、院長を激怒した。院長は日  
本橋に明治三十七年から産婦人科  
醫院を開業してゐる老醫であるが  
時勢に押されて、醫院が寂れて來  
たので、銀座のカフェー街を中心  
に、墮胎手術を行つてゐることが  
暴露、つひに、裁きの庭に曳かれ  
て行つた。



# 生きる 悲哀

## 深夜の異變

機織店員として主人上總屋藤兵衛の、絶對的信用を受けてゐる照三が、女中のお濱と割ない仲になつたのは、一昨年の五月頃のことだつた。

照三は、十六歳の時から上總屋に雇はれ、二十四歳の今日まで眞面目に働いて来た甲斐あつて、主人の藤兵衛は「支店でも出してやるから、立派な嫁でも貰ふんだね」と、口癖のやうに云つてゐた。お濱は、藤兵衛の郷里から、昭和九年の末上京し、上總屋の女中

となつたが、附近の若い者達から「上總屋のお濱さん、上總屋のお濱さん！」と、騒がれる程の美人。

そろ／＼獨立自營しようといふ照三が、この美人女中のお濱に食指を動かしたのは無理からぬことで、お濱は、主人の藤兵衛から「照三や、照三！」と信用されてゐる照三を（あの女なら……）

と、胸の火を燃やしてゐた。双方から惹ひ、思はれてゐたのだから、お濱と照三の仲は、どちらから手を出したともなく、出来てしまつた。

或る夜、照三は女中部屋へ忍んで行き、二人の將來について、相談をした。

「主人や店の者に知れてからでは露蔵が悪いし、いつそ今の中に、主人にお願ひして、結婚しようではないか、その方が二人のためだと思ふがね」

「それはもう、早いに越したことはありませんせんわ、妾は一日も早く家を持ちたいと思つてみます」

「では明日にも、御主人にお願ひすることによろしう」

話してゐると、運悪く、同僚店員政吉が、二人の話を聞きつけて

「おや、女中部屋に男の聲がするぞ、をかしいな——」

と、足音を忍ばせて、聞き耳をたてた。楽しい男女の話が、深夜の静寂を衝いて、洩れてくる。「照三さんだ、照三さんとお濱坊かふむ、人は見かけに寄らぬものだ」

「おこまぬいて感心してゐるところへ、主人の藤兵衛が起きて来た「おい／＼、誰だ、そんなところに、しやがんでゐるのは？」

## 寢室の悲劇

女中部屋を覗いてゐる政吉と主人の藤兵衛が、どんと突いて「政吉やないか、こんなところで



何をしてゐるんだ！」

「へい、一寸眼を覚ますと男と女の話が、ポソ／＼聞えて来るので、驚だと思つて、起きて来たところですよ」

「男の話がする、怪しからん話ぢや、彼方へ行きなさい」「へい」

政吉が行つてしまふと、藤兵衛は、苦慮をかみつふしたやうな顔をして、お濱の寢室を覗き見た

「おやッ、照三だナッ」

今が今まで、實直な店員として信頼し切つてゐた照三が、家族一同の寢静まつたこの深夜、女中部屋に忍び込んでゐるのだ。

藤兵衛は、永い間の信頼を一瞬にして、打破られた思ひがして、かつと、腹が立つた。

「おい、照三！」

吐るやうに叫ぶと

「あッ」

と、狼狽してゐる男女の物音が起つたが、藤兵衛は容赦なく「この夜更けに、女中部屋なぞへ何の用事があるんだ！」



ガラリ、障子を開けると、照三は逃げ場を失つて、立すくんでしまひ、女中のお濱は、蒲團の上に深くんで、うつ向いた。

「照三、此方へ来い、此處へ来て坐んなさい」

「はい、と、飛んだところをお目にかけて、何とも、申譯がありません」

「謝つて、事がすむと思ふかい。他の店員達の機嫌にならねばならぬ身が、こんな不始末を出して、どうするんだ」

「すみません、明日にでもなりましたら、お願ひに出ようと思つてゐたのですが、つい、こんな不始末になつてしまいました」

照三は、力なく、それに兩手を

突いて、ボロ／＼涙を落した。照三

兵衛は、いま／＼しきりに「お前には店を持たせやうと思つてゐた、縁も賣つてやらうと思つてゐた、お前の両親も、どんなに喜んでゐたか知れなかつたのに、馬鹿な事をする奴だ、他の店員達のしめしがつかなくなる。キツパリと、別れてしまひなさい、いゝか」

「……」

照三は、ぐつと、涙ぐんだ、突如、お濱が泣き出した。藤兵衛は立上りながら、叱咤するやうに叫んだ。

「別れるんだぞ、若し、清算しなかつたら、二人共、暇を出すからいゝか」

「……」

二人は無言で、主人を見送つた。

この八厘め

主人藤兵衛に、不善の現場を窺取された照三とお濱の二人は

「困つたことになつた」

と、途方に暮れてしまつた。

翌日になると、誰云ふとなく、

照三とお濱のことが、店内に擴がつてしまひ、照三が、店へ出て行く時、皆が日頃と違つた態度をする。顔見合せては、クスツと肩で笑ふ者もあつた。

（サアは、政の奴が喋りやがつたな）

今朝露所で縁を合せた時

（昨夜はお楽しみ——）

と云つたのが、政どんであつた。（昨夜の事を、政どんが知つてゐるのか知り——）

照三はときりとしたが、今店へ出て来て、政どんの云つた謎の言葉が判つた。

「畜生！ひどい奴だ！」

無性に腹が立つてならなかつた照三は、意地をさうに、上眼使ひに、デロ／＼見詰めては、ニヤリニヤリしてゐる政どんを呼んだ。「政どん、一寸話したいことがあるのだが……」

「ふーん聞かして貰はうか」

「彼方へ来て貰ひたいのだが、差支へないだらうか」

「俺は差支へないが、主人に見付かると、大目玉だぜ」

生、きる、悪戯

「直ぐに済むことだ、仕事の話はりになるやうなことはない」

「行かう」

二人は、裏手へ廻つた。朝露がサン／＼と、輝いてゐた。

「照さん、こんな所へ引張つて来て、何をやる氣だね」

「政どん、お前さんは此の家へ来てから、何年位になるんだい？」

「さあ、三年ちよつと位かね」

「私は七年になる、お前さんの位以上勤めてゐる。ますればお前さんよりは遙に、先輩になる譯だねさうぢやないか」

「先輩は先輩だよ……」

「私は、別に先輩にする譯ではないが、後輩が先輩を尊敬すること日本人の善徳だ、先輩を先輩と



して立てゝこて、後輩の背が立つと思ふ……」

「何だよ照さん、そんな話を聞かせるために、ワザ／＼こんな場所

へ呼んだのか、止して呉れよ、そんな話なら、主人の話だけでもうこり／＼してゐるよ」

「政どん」



「えッ」  
照三の聲が決るやうに、鏡かつたので、政どんが、愕然として振り返つた。照三は思ひきり、政どんの頬を平手でなぐりつけて  
「今朝の云ひ草は、あれは何だ、ふざけた事を云ふもんぢやないよこの八咫め！」

### 嘉助の忠告

照三が、政吉を振りつけてゐるところへ、同僚の嘉助が通り合せて、二人を引分けた。  
「政吉、彼方へ行きなさい！」  
「へッ」

嘉助が叱責すると、政吉は不承不承に立去つた。嘉助は照三と同じ軒で、この店では古縁の一人

だつたが、大の照三嫌いで、二人は兄弟以上に親しかつた。

「照さん、何だつてあんな事をするんだい、御主人の耳へでも入つたら、それこそ大變ぢやないか」  
「政吉の野郎が、あんまり、甜めたことを云ふものだから、つい、カッとなつてしまつたんだ、面目ないが見逃して下さい」

「照さん、甜めた話と云ふのは、照さんとお濃さんの事ぢやないのかい。昨夜の出来事なら、俺も聞いたぜ、お濃さんのことは、眞實なのかい、え、照さん」  
「……」

照三は、悲しいものがぐんぐん突上げて来て、涙ぐんだ。嘉助はいよく眞實になつて、迫つてく

る。

「照さん、俺は照さんを見貴と思つてゐるんだ、俺にだけは、本當の事を打明けてくれ」

「すまない、本當にすまないと思つてゐます。何も彼も嘉助さんに相談してからと思つたんだが、その暇もなくなつてしまひ……」

「すると、今朝聞いた話は、本當なんだね、嘘ぢやないんだね」  
「嘘ぢやない——」

照三は、苦しく言葉をのんだ。

嘉助は「さうか」

と、眉をビク／＼させながら、腕を組んだ。

「嘉助さん、すべて私の運が悪いのですよ、昨夜お濃と會つて、主

人にもお願ひし、嘉助さんにも相談した上、世帯を持たうと話合つてゐるところを、奪取されてしまつたんです、せめて嘉助さんにかけても、相談出来たらと思つて、口惜しくてなりません」

照三は、淋しさにハラ／＼落涙した。  
嘉助は、急に笑顔になつて、照三の肩を叩き

「出来たことは仕方がない、これからが問題だ、照さんもお濃さんも、一緒になる決心でゐるんだね、肝は定つてゐるんだね」  
「それはもう、お濃にしろ、私にしろ……」

「さうか、ではかうしなさい、もう一度御主人に相談なさい、頼ん

生きる悲哀

で許しを受けて見るんだ」

照三は答へなかつたが、嘉助は熱心にすゝめる。

### 親友の粹

親友嘉助にすゝめられた照三は

「なるほど……」  
と納得し、一應お濃に會つて相談した上、主人の前へ出ようと思つた。

それにしては、お濃に會ふのが昨夜の今日だけに、都合が悪かつた。

これは臨になり、陽なたになつて力になつて呉れる嘉助に相談するのが上分別と考へた。

「嘉助さん、僕としては、主人にお願ひするのだつたら、お濃と二

人で……と思ふのだが、どんなものでせうか、ね」

「尤もだ、一人で頼んでは横に耳を押してゐると見られても仕方がない。二人で頼むのが何よりだ、私も賛成だね」

「さうなると、お濃に話をしなればならぬが、何だ彼だと、噂の喧しい時に、女中部屋へ行つてお濃に會ふのが心苦しい、何とかいい工夫はないものでせうか」

「なに、そんな事なら心配には及びませんよ、私が呼んで来て上げるから、人目につかぬ場所を相談したらどうだ」

「嘉助さん、何から何までお世話になります、一生恩に著ます、では勝手なやうですが、木村屋まで



来るやうに、云つて下さい」

「いゝとも、あの木村パン屋の喫茶部だね、判つた〜」

嘉助が、萬事のみこんで呉れたので、照三はほつとしたから、同じ町内の木村屋へ行つて、紅茶を飲みながら、お濱の来るのを待つてゐた。

間もなく、お濱が慌たしく這入つて来た。仕事のあひ間に抜けて来たらしく、額に汗を滂ませ、ふう〜荒い呼吸をしてゐた。

「照さん、何か急な用事でも起きたの、忙しい最中に呼出したりして……」

「急な用事と云ふ事ではないが、二人の事で相談があつたものだから、嘉助さんに呼んで貰つたんだ

まあお掛け——」

お濱が、黙つて腰掛ける。細々とした肩の間から、白い襟が美し



い。女中奉公するには、餘りに美しく、傷々しい身体である。照三は、ちつと、いぢらしく見やつて

ゐたが、何時か眼が熱んで来た。「皆が、ひどい事を云ふので、先刻まで泣いてゐました。もうあの家にゐるのは、いやです」

お濱は、訴へるやうに云ふつぶらな瞳から、ポタリ〜と、大粒の涙が流れた。

「その事で、相談があるんだ」  
照三は、乗出した。

### 心の闇路

喫茶店へお濱を呼出した照三は嘉助の進言に基き、

「二人揃つて、御主人にお願ひに行かう」

と、相談したが、お濱は何故か「御主人は昨夜も、あんな風に云つて居られましたし、到底買成し

ては下さらないと思ひます。妾は主人の前に出るのは、死んでもいやです」

と云つて、承知しなかつた。主人の許しを受けないで、世帯を持つとすれば、勢ひ、店を出るより他に、辦法はないのだが、照三には恩義がある。大恩ある主人を裏切つて、お濱との甘い生活に浸る事は照三の良心が許さなかつた。飽迄、主人に頼んで、二人の仲を許して貰ふのが、雇人の道である——と、照三は思つた。

「二人が一緒になるには、主人の許しを受けるか、あの店を出て行くか、どつちかの道を選ばねばならぬのだが、店を出て行くことは、僕には出来ない。お願ひだけ

ら願を忍んで、主人の御へ行つて呉れ——」

照三は、一生懸命だつた。もう相談すると云ふよりは、哀願してゐる照三だつた。

ちつと聞いてゐたお濱は、齒型をつく程、強く、唇を噛んで頭を横に振つた。

「妾は、どんな事があつてもいやです。昨夜の御主人の顔を見ひ出すと、身の毛のよだつ思ひがいたします。二度と、二度とそんな話はいしないで下さい」

「さうか、これほど云つても、承知して呉れないのなら、仕方がない。主人の許しも受けない、店を出るのもいやなら、一體どうしたらいいのだ、別れる氣なのかい」

「照さん、別れる心なら、こんな所まで出て来ません。妾は死んだつて、はなさない覺悟でゐるので、あなたが別れて行つたつて、妾はどこ〜までも附いて行きませから平氣です」

「そ、そんな積りで云つたんぢやない、僕だつて、別れるのは死んだつていやなんだ」

唇を閉じた照三は、懇と恩義の板挟みとなつて、苦悶した。お濱は、立上つた。

「妾、仕事を放つたらかして来たのですから、お先に歸ります。何彼の相談は、今夜でも……」

「あゝ」

話したいこと、相談したいことが山程あるやうな氣がしたが、い



さ、お濱を眼前にして見ると、言葉が胸につかへた。

しよんぼりと、力なく立去つて行くお濱の姿を、引止める勇氣も失せて、無言、見送る照三の心は闇を行くやうに、暗かった。

絶望

照三は、最後の闘ひをするために、主人藤兵衛の前に出た。昨夜あんなことがあつたので、主人の態度は、何時になく厳肅だつた。「一生一代のお願ひがあつて御願ひいたしました……」

「私に出来ることなら、どんな事でもしてあげよう、まあ話して見なさい」

藤兵衛は、吸ひさしの煙草を、

火鉢の灰の中に突きさすと、胸を組んで聞き手になる。照三は、イクンと、生唾をのみ込んで、頭を上げた。

「昨夜は、飛んだ失禮をいたしました。只今までお濱との事について、いろ／＼考へました場句、御主人さまにお願ひしたいと、決心したので。お願ひ、御恩になりました御主人さまに、言葉を返すやうなお願ひで、定めし、恩知らずと御考へになるでせうが、私に取りましては、一生の間、ございます」

照三は、益まで云ふと、ビツショリ汗をかいて、息苦しくなつた。彼に見れば、この世の中に主人ほど恐いものはない。照三に取

つては、主人の前でこれだけ喋るのは一杯だつた。

「で、私に頼みと云ふのは、どんな事だね、遠慮することはないから、簡単に、ハッキリ云つて見なさい」

主人の顔が、馬鹿に難かしく見えた。照三に、藤兵衛の身動き一つが、ビシ／＼と胸にこたへた。「一生のお願ひです。お濱との仲を許して、許していただきたい、と思ひます」

おろ／＼と、ふるへを帯びた聲だつた。言葉を切つた照三は、たまりかねて、壁に突伏すと、ハラハラ涙を流して、嗚咽した。

「照三！」「ハイ」

静かにもたげた照三の顔を、藤兵衛はキツと見詰めた。

「お濱のことなら、昨夜あれほど云つたではないか、雇人同士で、勝手な真似をして、あゝさうかと許してゐては、店のシメシがつかぬのだ。私の店にゐる間は、絶対に許せぬから、二度と、聞かせなすて呉れ」

「……」  
照三は絶望した。新しい遊しみがグイ／＼こみ上げて、照三は一層シヤクリ上げた。

血に狂ふ

必死の哀願を、唯一言のもとにはねつけられた照三は、絶望の深淵にたゞき込まれながら、自分の生きる意志

室へ引取つた。

（いつそ、死んでしまはうか）  
恩と義理の二道を、どうさばきやうもなかつた照三は、ふつと、



死の象徴に襲はれたが、その時「照三さん！」

と、か細い女の聲が、照三の魂を呼返した。

「お濱さんだね、遠慮することはないよ。お濱入り——」

「えー」  
お濱は、主人の室から力なく、しほ／＼と立去つて行く照三の姿を見て、後を追つて来たのであつた。照三は

「主人にお願ひしたが、結構、許しては貰へなかつた。二人が一緒になるためには、この店を出るより他に、方法はないが、現在の私にはそれが出来ぬ。恩義の前にはお濱さんの仲も諦めねばならなくなつた！」

と、聲を揚げて泣いた。  
お濱は、照三に寄り添ひながら



「いやです。いやです。照さんと別れる位なら、あたし死んだ方がましです。別れるなんて、そんな悲しいことは云はないで下さい」と、これも泣く。

「でもね、店に働いてゐる以上主人に叛くことは出来ないし、別れるより……」

「云はないで真蔵、あたし達の仲はそんないゝ加減なものではない筈です。ねえ照さん、どうしても一緒になれないのなら二人で死んで下さい、死んで——」

「死ぬ？」

「あたしは、死んだ方がズツと幸福です」

お濱は涙ながらに、照三をかき口説いた。

「お濱さん、有難う。僕は漸く自分の前途に、光明を見出したやうな気がします」

照三は、ちツとお濱の身体を抱きしめた。お濱は涙に濡れた顔に、笑ひを存べて照三の顔を遠ましい胸の間から、惚れくくと見詰めた。

死を伏意した二人は、それから三十分程すると、屋根裏の仕事場へ上つて行つた。誰もゐない。二

人は隠見合せて、ニツコリした。

「これで——」

お濱の差出す細紐で、彼女の細い首を絞めて殺した照三は、仰向けに倒れたお濱の乳房を狙つて、刺身庖丁をぶつすり、突き立てたお濱の縫紉工のやうに白い身体が真紅に染まつた、突如ドカ／＼といふ足音、死におくれた照三は、家人に取押へられ、今は囁託殺人罪で獄舎に呻吟してゐる。

# 原宿女中殺し

## 石部金吉

小濱昇蔵は、小さい時から駿河が標ひであつた。野段、上野野段

へ入學出来ぬ程、貧しい家庭に育つた譯でもなかつたが、小學校を卒業すると「野段へ行くのは嫌だ、野段がし

たい」

と、自分から進んで他家に奉公した。

自分から奉公を希望するだけであつて、いざ、奉公して見ると、なか／＼よく働く。奉公先でも

「この調子だと、今に立派な商人になる」

と、昇蔵の將來を囑望してゐたが、昇蔵は年と共に、いよ／＼眞面目に働いた。

煙草も喫まねば、酒もやらないし、女は猫更、愛ひと來てゐるので、二十歳過ぎる頃の昇蔵の評判は大したものだつた。

「昇蔵さんは残る一疋だから、今に大金持になるよ、嫁に行くならあんな男のところへ行くのだね」

原宿女中殺し

近所の、娘持つ親達がワイ／＼

騒ぐ。主人夫婦の房でも、近所の評判が良いので、大喜び。



り眞面目なので

「今時の若い者が、これでいゝのだらうか」

と、一寸不安になつたりした。

今日も今日とて、眞ッ黒になつて働いてゐる昇蔵の姿を見た主人の白石好造さんが、女房のお繁さんに向つて

「おいお繁、あれを見な……」

「何ですの？」

「昇蔵だよ、まだ襦袢前だといふのに、感心によく働くぢやないか珍しい男だよ」

「又昇蔵の事ですか、あれの感心なのは、今始まつたことぢやありませんよ」

「違へよ、話が……」

「だつて、よく働く、感心な男だ



と賞めていらしたぢやありませんか

「賞めるには賞めたが、何だか心配だね、これから先あれがどうなつて行くかと思ふと……」

「その事なら、妾だつて氣になつてみたんですよ。若い中に遊樂しておかないと、年取つてからの女遊びは止まないさうですからね、昇蔵が眞面目で、堅い男だけに氣になりますよ」

「さうか、俺は何だか、年取つてから遊樂するんぢやないかと、氣になつてたまらないのだよ、そこでだね、お察——」

好造さんは、固い決意を眉宇に凝らした。

色里通ひ

「俺はいろいろ考へたが、眞實に堅いのか、假面を被つてゐるのかそれが判らないから困ると思ふのだよ。堅い事を云つてゐて、陰では飛んでもない事をやつてゐる食はせものもあるからね」

主人好造さんは不安相な眼をして云つた。お察さんも同感だつた。

「妾も、その事で心配してゐたんですよ。どうしたものでせうね」「それだ、俺は隣の金どんにでも頼んで、何處かの色里方面へでも誘つて見て貰つたらと思ふのだよ。本心から堅いのなら、遊ぶ氣がないし、假面を被つてゐるとしたら直ぐに替ると思ふのだが……」

「自分の子供でもない者を、それまでする事はないと思ひますが、まあ、それも良いでせう、金どんに頼んで御覽なさい」

妻が賛成したので、好造さんは早速、隣家の白米屋の雇人金太郎を訪ね、附近の喫茶店へ誘ひ出した。金太郎は三十前の青年で、相當以上に酒と女の遊樂を修養して來てゐる。

「旦那が、こんな所に連れて來て下さるなんて、少し、變ですわ。何だか氣味が悪いですよ」

「は……。これには譯があるんだよ、頼みがあつてね」

「なるほど、さう來なくつちやピントが合ないと思つてみましたへ……」

「他でもないが、家の昇蔵の野郎ね、彼奴近頃ポーツとしてゐやがるから、女買ひにでも連れて行つて貰ひたいと思ふのだが、どうだらう？」

「へえ、私か案内役で——」「金は十五圓しかない。これで遊んで來て貰ひたいんだ」

「オンの字ですよ。今夜でも誘つて、遊んで來ませう」

「然しね、これは何も無理でなくともいゝんだよ。駄だと云つてどうしても行かなかつたら、その時は放つといつてお呉れ」

「へい、ようございます」  
好造さんの頼みを、胸を叩いて大きく引受けた金太郎は、日が暮ると昇蔵を誘ひに來た。

「私け店があるから……」

と云ふ昇蔵を  
「いゝよ、折角誘つて下さるんだから行つて來な」

と、帳場にゐた好造さんがそれとなく云ふ。間もなく昇蔵と金太郎は出かけて行つたが、後に残つた好造さん夫婦は、意味深な顔で突合せて

「どっかな、行くだらうか」  
「妾は行かないと思ひますね、金さんが手を焼いてゐる妾が、眼に見えるやうですよ、ほは……」

遊廊の旋風

好造さんとお察さんが、首を長くして待つてゐるところへ、金太郎があたふた歸つて來た。

「おや金さん！一人で歸つて來たのかい？」

「へえ、此處の昇蔵どんと來たら男ぢやありませんよ、あんな男は未だ會つて、見た事がありません、驚いた化物ですわ」

「金さんを放つぽり出して、一人で遊んでゐるのかい？」  
「さう來れば頼もしいんですがね、まるつきり血の通つてゐない人間ですよ」

「すると駄目だつたのかい」  
「へい、折角旦那に頼まれたのですが、これだけは御勘辨願ひます此方の壽命が縮ります」

金太郎は譯をしかめて、閉口嘔首する。好造さん夫婦は、いよいよと悦に入つた。



「金さん、よく判つたよ。ところで今夜、家を出てからの事をもつと、詳細に話して貰ひたいものだが……」

「詳細も何もありはしません。酒を飲むかと聞いたら」

「そんな物を飲むより冷水を一杯飲みたい」

と云ふので、これは真つ直ぐ女買ひに行くに限ると、毆タクを拾つて吉原へ出かけた。途中

（自動車なんかへ乗つて、何處へ行くんだね、夜道に日が暮る露はないし、無駄な金使ひはしない方がいゝ）

と、説教めいて来るのを

（まあ、今夜のところは俺にまかせて呉れ、いゝところへ連れ

て行つてやる——）

と、無理矢理吉原遊廓へ連れ込むと、さあ、驚きました。

（金さん、俺は獨身だが、こんな女を相手にするのは御免だよ、見そこなはないでお呉れ）

昇蔵とんは大變な剣幕でね」

金太郎は汗をかきながら、好造さん夫婦の顔を見廻した。

「ふむ、それからどうなつたんだね、なか／＼面白くないか」

好造さん夫婦が乗出す。金太郎はチエツと舌打した。

「面白くはねえや、物騒で仕方がねえ、吉原へ着いて兩儀の女将屋で、妓夫と花魁が、呼込みをやるするところだ！

が、昇蔵とんみたいなのは初めてです」

金太郎は不平満々たる顔をして言葉を切つた。好造さん夫婦は

「へー、さうかい」

と、ニコ／＼と、金太郎の話を聞いてゐたが、彼の話が終ると「それは飛んだ災難だつたね、こ

（よさけるなよ、俺達はない、こんな女を買はなかつたつて、浮世を知らねえ御嬢さん方が、大手をひろげて待つてゐるんだ、嫁百人に嫁一人といふ世の中に、花魁など買へるかい、餘り變な聲で呼ぶんぢやないよ、馬鹿ッ！）

昇蔵とんが大聲で怒鳴つたから大變、カン／＼になつた妓夫が、ラ／＼と飛出して来た……」

バラ／＼つと、妓夫や若い男衆が昇蔵とんの周圍を取巻いて

（やい、もう一度云つて見ろ！）と、大變な剣幕です。これは大變な事になつたと思つた私は

（まあ、黙して下さい、こ

れは少ないが、何處かその邊で、ビールでも飲んで、機織を直して呉れ」

と、好造さんが五圓包んで出した

「先にお礼かりしたのも、その儘ポツポに藏つてあるんですが、その上こんなにして頂いちゃ、何だか……」

「なに、遠慮することはありません、百、二百とまとまつた金ではないし、持つて行きなさい」

「へい、有難うございます、では遠慮なく頂戴いたします」

金太郎は五圓の紙包みを押戴いて、黙つて行く。

入れ違ひに

「只今——」

と、昇蔵が黙つて来た。

二七



「へー、さうかい」  
と、ニコ／＼と、金太郎の話を聞いてゐたが、彼の話が終ると「それは飛んだ災難だつたね、こ



「おや、もう歸つて来たのかい、馬鹿に早かつたぢやないか」

「へい、なーにね、遊びに行くところであつたつて、芝居や活劇へ行くのぢやありません。毬タクで吉原遊園へ連れ込みやがつたんだ、見損なふない」

と、下駄で頭を踏つて歸つて来ましたか、あの野郎、飛んでもない男太者ですよ」

「さうかい、まあ若いのだから、いゝぢやないか」

かうした逸話を生みながら、昇殿は成人し、間もなく獨立自營する事となつたのである。

藝妓屋の女將

好造さん夫婦に可愛がられつゝ、

たいことがあるから、至急お立ち下さい」

といふ妙な使者があつたので、昇殿は

「どんな用だらう」

と、所用にかこつけて、喜美本に歸を見せた。

「よくいらつしやいました、さあどうぞ——」

通された部屋には、彼の來るのを待つてゐたと見えて、既に酒肴の支度があつた。

「まあ一杯！」

と、女將が酌をする、二杯三杯と重ねてゐる中に、飲めぬ口の昇殿はスツカリ酔倒してしまつた。

「大層飲まつた口上でしたが、御用件といふのは、一體どんな事ですか、女中殺し」

成人した昇殿は、廿七歳の暮に獨立し、澁谷區原宿町に新炭商を開いた。

翌年の春には妻を迎へ、手堅く商賣したので、附近の信用を集めて隆々繁昌する。

「昇殿さんはおかみさん以外に女といふものゝ味を知らないさうだよ」

と、附近の人々が噂して笑つてゐたが、事實昇殿は妻以外に異性を知らなかつた。

何一つ道楽の経験のなかつた昇殿は、廿八歳の暮妻を迎へるまで他の女との交際は只の一度もなかつたのである。

「女に経験がない、女に経験がないと云ひやがるが、藝妓や女將を

買ふ氣なら、今日直ぐでも買へるんだ、人を馬鹿にするねえ」

見栄を切つた昇殿は、いまくしさうに舌打ちして、その夜、中野の新井に遊んだ。

新井薬師の花柳街は新しく許可になつたもので、その頃、遊客の吸引策に腐心してゐるところだつたので、昇殿は、呼んだ藝妓にも歌待され、待合の女將、女中にまでチャホヤされて、いゝ機嫌になつて、一夜を過ごした。昭和二年三月頃のことである。

間もなく、その藝妓の紹介で、新井見番の「喜美本」といふ藝妓屋の女將を知つた。

或る時、喜美本の女將から「一寸お目にかゝつて、御相談し

と思ひますよ、はつはム」

昇殿は百パーセントの勇氣を見せて、笑つた。

間違ひの因

喜美本の女將は、婿を含んだ瞳をかゞやかせながら

「旦那は、綱島温泉を御存じですか」

「温泉？ サア、この年になるまで一度も行つたことがありません。婿と一緒になつた時、せめて一週間は……と思ひましたが、店の事が忙しかつたものですから、到頭行かずじまひでね、へへ、……」

「違ふんですよ、温泉は温泉でも、そんな派手なところぢやないんで

すね、話を聞かぬ中は、酒を飲んでも酔へませんよ、はつはム」

「儲かる話があるんですよ、旦那をバトロンにして、たんまり儲け



ようかと思ひましてね、如何でせうか」

「バトロンは困りますな、炭屋がバトロンになつては、ど、どうか



すの、東京市にあるランチバーの好客なんです。近頃、郊外へのランチバーが流行するので、とても有名になつてゐるのです。東京市に取つては一番近い場所だし、おまけに温泉も湧くといふのですから、熱海や湯河原みたいには行きませんが、まあ、大したものですよ」

「ふむ、其處に儲け話がつてゐると云ふ事ですね、温泉屋でも始める氣ですか」

「まあ、商賣を始めるのに相違はありませんが、もつと功利的なもので近代的なものです」

「儲かりますか、本當に——」  
「保証しますわ、連れ込み専門の温泉旅館を開業して、東京市中の

お客を釣るのです。土曜から日曜日にかけての温泉が眼に浮ぶやうですよ、如何です、買成して貰へますか」

「儲かることなら買成しますが、温泉旅館なんて、そんなに、買成して貰ひませんか」

「私を信用して下さいね、まあ、何でもいゝから私と一緒に、下敷分して下さいな、設備ホテルさへ大急ぎしてゐる時ですもの、氣の利いた旅館を開業すれば、大當り間違ひなしですよ、下敷分して見込みがあるやうだつたら、資本金の半分出して下さいな、二人で共同経営と行きませう」

「なるほど……」  
「ちや何時行つて下さいますか知

ら——」  
「そんな話なら、何時だつて構ひません、商賣と同じことですからね」

「では、明日お願ひしますわ」  
「承知しました」

いよいよ翌日になると、二人は喜美本の若い妓女を伴ひ、和氣盛々として、網島温泉へ乗込んで行つた。

「ウーン、これは素晴らしい」  
昇蔵は、網島温泉の風景に、感歎の叫びを上げた。

### 激 怒

網島温泉の檜分に来た昇蔵は「なるほど、此處なら女將さんのお言葉通り、吃度繁昌しますよ」

と喜美本の女將に迎合してしまひ、話の柄の冷めない中にやるに賭ると、早速温泉旅館開業の準備に取掛かつた。

喜美本の女將は

「資本金を半分つづつ出すにしても四千五百圓位は出して貰はねば困ります」

と云つた。昇蔵は炭屋の枱が繁昌して、一萬圓近い貯金が出来てゐる時だつたので

「四千五百圓位なら……」  
と温泉旅館の隆盛を夢見つゝ、四千五百圓を女將に渡した。

「巧く行つた！」

と北見笑んだのが喜美本の女將で、藝妓屋の枱が左前になつてゐる時だしするところから、三千圓

原書 女中殺し



を抜き取つて私費に使ひ、残金の千五百圓で、温泉旅館を開業したが、喜美本の女將としては、もう温泉旅館などどうでも良かつた。

なつて来た。

「これではやり切れぬ、今までの損害は兎に角、自分の足下に火が點いては大變だ！」

昇蔵はサジを投げてしまひ、女將にこの事を訴へる。

「儲かると思つてゐたのに、妾も都合抜けがしましたわ、矢張り餅屋は餅屋で、餘計な事をするもんぢやありませんね、妾もこりこりしました」

女將にやる氣がないので、大きな損害を蒙つたまま、腹立たしたが、昇蔵とても馬鹿ではない。

(僅か数箇月の間に、こんな大損害をする筈がない。女將の枱に何か陰謀があつたのではあるまいか) 四圍楚歌の聲を、驚らに氣にな



るのは喜美本の女將の仕打である  
しかも以前と違つて、筆を返すや  
うに、冷淡になり、昇蔵の顔を見  
ても苦い顔をする云ふ有様――  
「どう考へても女將のため、一  
杯食はされたらしい」

昇蔵は極端に、女將を疑ひ、女  
將を憎悪し始めたが、この時  
「あなたは、喜美本の女將にやら  
れたのですよ、その證據にはあな  
たが左前になつたのに、喜美本は  
旭の昇るやうな雲昌振りぢやあり  
ませんか」  
と、火に油を注ぐやうに、昇蔵  
を突付けたものがあつた。

「畜生――」  
壁い一筋の昇蔵は、この言葉を  
聞いて、カーッとのぼせ上つた。

恨みは深し  
たゞ一筋に、突詰めた心になつ  
た昇蔵は、喜美本の女將に對する  
復讐を、晝夜の罪なく、考へめぐ  
らした。

その擧句  
喜美本が疑ひしてゐるのは、瀧  
行妓の文龍かゝるからだ、大黒柱  
の文龍かゝるなければ、喜美本は自  
然に没落する……」  
と思つた。

文龍を、喜美本から抜くために  
は、彼女を毒殺すればよい。  
「身請の金だ、身請の金だ」  
昇蔵は、文龍身請のために浮身  
をやつしてゐたが、以前の昇蔵な  
らゝ知らず、家運の傾いた現在  
では、金策の見込みはない。

然し、喜美本の女將を、このま  
まにして置くことは、昇蔵の意地  
が許さなかつた。

「たとへ人殺しをしても……」  
昇蔵は、石のやうに固い心を鬼  
にした。復讐のためには、手段も  
方法も違はぬ悪鬼となつてしまつ  
たのだ。

恰度この時、昇蔵の隣りに遊谷  
區原宿にある淺野侯爵家別邸の女  
中大島しでのさんの妻が、ポーッ  
と浮んで来た。  
淺野侯爵は、昇蔵に取つては  
上々のお得意であるし、女中のし  
でのさんとは殊の外、懇ろにして  
ゐた。しでのさんは本年十九歳の  
厄年である。  
「あの女は、物堅い女で、相當の

貯金をしてゐる」

昇蔵は、呟いた。しでのさんが  
眞々として、郵便局へ通つてゐる  
妻を、幾度か見てゐる。

「さうだ、あの女を――」  
強く決意、復讐の悪鬼小澤昇蔵  
は、罪も恨みもないしでのさんに  
恐ろしい毒牙を伸ばし、遂に昨年  
十月十四日白晝

「しでのさんひますか」  
と、淺野侯別邸の女中部屋に上り  
込み、色仕掛で、しでのさんを絞  
殺した上、郵便貯金通帳、現金等  
合計五百八十餘圓を強奪逃走して

しまつた。

しでのさん殺しは、原宿女中殺  
し事件として、迷宮に入らんとし  
たが、後続な警視廳當局は、よく  
昇蔵の悪行と斷定檢査したのであ  
つた。

公判は東京府事地房裁判所下林  
裁判長係り、江口檢事立會で開廷  
されたが、昇蔵は一切を悔悟し  
「死んで、しでのさんの墓にお詫  
したい」

と泣いた、其後第二回公判が開  
かれたが遂に死刑が言渡された。

# 改悛の涙

## 映書狂の被告

東京區裁判所の控訴一號法廷に  
映書狂の被告

二十歳前後の被告人が曳かれて來  
た。傍聴席を埋めた傍聴人の視線

が、一齊に年若い、この被告人の  
編笠姿に集中される。  
法官席中央に著席した西村判事  
が、嚴かな聲で

「山村善次郎――」  
と呼ぶ、若い被告人が立上つ  
た。看守が編笠を取除き、手錠を  
外した。法廷が緊張する。

「原籍は埼玉縣北埼玉郡志多見村  
二三二番地、現在住所不定だね」  
「その通りです」  
「前科はどうだね」  
「ありません」

一通り身分經歷の調べが終ると  
西村判事は、檢事席の重富檢事を  
促す。重富檢事は

「被告人に對する公訴事實は、記  
訴狀記載の通りであります」



と述べて着席。西村判事は記録から眼を離し、被告人を見詰めた。被告人山根善次郎は、いさゝかの悪びれも見せず、平然として空嘯いてゐる。憎々しいまでの落付振り。

「被告人は何歳か」  
「二十歳です」  
「徴兵検査前だね」  
「さうです」  
「眼鏡はあるか」  
「母が居ります」  
「兄弟は？」  
「入獄中の兄善太郎と、幼い弟盛が居ります」  
「被告人は何時頃、東京へ来たのか、東京へ来て何をしてみたか」  
「十六歳の時、友人と二人で上京

しました。東京へ来てからは店員になつたり、職工見習となり、給仕などやりましたが、何をやつても面白く行きませんでした」  
「被告人は、映画が好きだといふが、本當かね」  
「映画は好きです。その中でも観劇映画が好きで、大抵の役者は知つてゐます」  
「ふーむ、さうかね」

ケロリと云つてのける善次郎の大膽さには、多くの観衆を惹いた。西村判事も舌をまいて驚いてしまつた。  
「小僧や給仕をしながら、良く映画見物に行く金があつたね」  
「は、すみません」  
「驚くことはない、映画を見物に

行くため、他人の品物を盗んだりしたんだね」  
「四、五回ありましたが、その度に、兄さんやお母さんが金を貸してくれました」  
善次郎は映画見物の費用を得るために悪事を働き、數回起訴檢束処分を受けた顛末を陳述する。

審理は進む

すると、西村判事は威儀を正した。  
「検事局の起訴狀に因れば、昭和十一年一月十七日午後十一時頃、日本橋區兩國一ノ二〇五「三商會」から銅線二十七貫、價額九十圓相當の物を窃取した外、二月二十二日までの間に、數回四回に亘

り、銅線八十六貫約三百圓を窃取したとなつてゐるが、それに相違ないかね」  
「相違ありません」  
「盗んだ銅線はどうしたか」  
「買りました」  
「買った金は？」  
「下宿代に支拂つたのもありますし、カフェーで費消したのもあります」

「カフェーといふのは、警察や検事局で云つてゐる（朝日報）と云ふのか」  
「さうです」  
「朝日報の女給と關係があつたやうだね、その女給の名前は？」  
「カフェーでは須美子と呼んでゐますが、本名は藤原光江であります



す。今回こんな罪を犯しましたのも、原因をたゞせば、女故でありました」

「女の色彩に迷つて、悪心を起したといふのか」  
「いえ、色彩に迷つたといふのは進みます。自分のやうな貧乏な

然もヤクザな男を愛してゐる光枝は、不幸な女だと思つたからです。何とかして美しい著物でも買つてやりたいと思ひましたが、収入のない自分にはそれも出来ません」  
「よろしい、檢舉されてから悪い事をしたと氣が付いたか、後悔したかね」  
「後悔はしません、自分のやうな人間は、刑務所へ行くのが當然だと思つてゐます」  
別段、悔悟の色も見せず、被告人はズケ／＼と陳述する。面喰いまでに落付いた被告人の態度に、

（未だらしい青年だ）  
と、滿廷の人々が、驚歎する。事實審理は終つた。證據調べが簡單に終ると、傍聴席の隅に、す



すり泣きの音が起つた。悪徳の裏  
が、妻の主人公に注がれたが、  
この時悪徳人席に控へてゐた佐々  
木亮次辯士が、

「裁判長！」

と、席に立つた、そして云ふ。

「本辯士は被告有利のために唯  
一人の證人を申請するものであり  
ます。それは當公知延に、息子の  
身を棄じて逃々傍聴に来てゐる母  
親であります。被告人の生立、兩  
親の氣持等を訊すため、在廷證人  
として御許可あらんことを切望し  
ます」

### 母は泣く

證人席に起つた老母は、滿延の  
眼を凝めて

「良心ニ従ヒ……」  
と宣誓する。

「證人は被告人の母だネ」

「左様でございます。いろ／＼御  
手数をかけまして、申請がありま  
せん」

老母は、涙一杯の眼を伏せて、  
丁座に頭を下げる。西村辯士の眼  
にも、優しい同情が見受けられた  
が、被告席の善次郎は窓外の景色  
を眺めて、母親の言葉を馬耳東風  
と聞き流してゐた。

西村辯事が

「被告人は小さい頃、家出してし  
まつたさうだね」

と、善次郎の生立を訊ねる。老  
母は、よくお尋ね下さいましたと  
いふ風に

「善次郎は小さい時から、學問が  
嫌ひで、亂暴な事ばかりしてゐま  
した。親を困らせ、兄弟に心配を  
かけてゐましたが、小學校を卒業  
すると間もなく、二十三圓程の金  
を持つて家出してしまひました。  
警察へも頼み、いろ／＼手を盡し  
ましたが、どうしても判りません  
ので（まあ、刑務所へ行くやうな  
ことさへなければ、どこで暮すの  
もいゝだらう）と、皆も諦めてゐ  
ました。四年振りに、ひよつこり  
歸つて来たことがありましたが、  
スツカリ都會の人間になつてしま  
つてゐましたので、兄の善次郎が  
心配しまして

（恰好だけ立派になつても駄目だ  
から、これからは家にゐて、俺と

一繼に感業をやれ）

と、説教しましたが、善次郎は  
この夜、又もや、家の金を持つて  
何處かへ行つてしまひました。

一年程しますと、東京の知人か  
ら、善次郎が悪い事をして、警察  
へ留置されてゐると知らして來ま  
した。

（悪い事をする人間でも、自分の  
ためには實の弟だから……）

兄の善次郎は、取るものもとり  
あへず、東京へ向つて出發しまし  
たが、間もなく、お金を送れと云  
つて來ましたので、五十圓程都合  
して送つてやりました。この金は  
善次郎が迷惑をかけた人々に、辨  
償したのだといふことでした。善  
次郎を連れ戻つた善次郎は、その

時兵衛に行くことになつてしまし  
たので

（俺は入獄するが、お前がそんな



有様では、安心して國家に御奉公  
することは出来ない。これからは  
眞心から、料簡を入れかへてくれ  
いゝか）

と、今までとは違つて、嚴しく

言ひ聞かせてゐました。

### 法廷美談

兄の善次郎が、悪々と説諭する  
と、弟の善次郎も流石に、泣いて  
居りました。そして

「お父さんやお母さんのことは心  
配しないで下さい。僕が兄さんに  
代つて、孝行します」

と云ひましたので、善次郎も漸  
く安心したやうでした。

間もなく、善次郎は入獄してし  
まひましたが、改心した善次  
郎は、善次郎が入獄してしまふと  
態度がガラリと變つてしまひまし  
た。つひには、家の金を持つて、  
再び家出してしまつたのです。兵  
衛に行つてゐる善次郎が心配して



はいけないと思つて、善次郎の家出したことは知らせせんでした。善次郎が家出してから、二月程しますと、こんな大それた罪で刑務所に囚るといふことを知りました。兄善太郎に較べて、弟の善次郎は性根の腐つた時鹿者です。親の私達は諦めてみますが、兄の善太郎に迷惑をかけるやうな事があつてはと、それだけを心配してゐます。それから兵隊にゐる善太郎から、最近こんな手紙が来て居ります」

と、老母は一通の手紙を西村判事の手許に提出して、席を去つた。西村判事は、善次郎を起立させた後

「今聞いてゐた通りだ、刑務所にあ

る兄さんから手紙が来てゐるさうだから、讀んで聞かせる」

と、老母から受取つた手紙を取上げた。

……私が入獄する時、お前は年若い時親の事は心配するな、屹度兄さんと二人分の孝行をするからと、私を送つて呉れたではないか。それに何事だ、毎日々々ぶらぶらしてゐるとの事だが、お前がその判事では、親の身の上が案ぜられて、國家に擲げた自分の決心が絶つてくる。自分は毎月大圓四十圓の手當を買つてゐるが、お前の金が要るのだつたら、自分は好きな煙草や、たべたいハンを食はないでも、お前に送金してやるぞ。自分は近々の中〇〇坊へ出

謝することになつてゐるから、手紙が最後になるかも知れぬ。兄の願ひだ、改心して親親に孝行して呉れ……

手紙の文面を讀み聞かされた善次郎は、急に籠を敲うて、泣き出した。そして

「すみませんでした 私が間違つて居りました」

と悔悟の涙を流すのだつた。審理は終つた。重富判事が懲役一年を求刑する。佐々木辯護士が減刑と執行猶豫の辯論をなし、西村判事は彼の改心を認め、懲役一年、執行猶豫三年の判決を言渡した。感服した善次郎は、かくて、更生の第一歩を踏んだのである。

## 弱者の悲しみ

### 紺屋高尾

一世のヒロ女、岡部定が浮川竹の女になつたといふ名古屋遊廓に高尾といふ娼妓がゐた。

年は廿一歳で、歌舞風の美人であつたが、客扱ひが親切なところから、忽ち有名になつた。

数あるお客の中に、吉村政太郎といふ男があつたが、この男がかくの熱心振り――

初會、裏、馴染みとなつて數ヶ月の間、三日にあげず存続して呉れる政太郎を、高尾も、憎からず思ふやうになつた。

### 弱者の悲しみ

或る夜のこと、土砂降りの中を自動車を飛ばして、景氣よく乗りつけて呉れた政太郎が

「今夜は、相客は少いやうだが、雨の晩は淋しいものかね」と、高尾に聲をかける。

「それもある、こんな降りですから客足もパツタリ止りますよ。今夜はお茶かと廣つてゐるところへあなたが来て下さつたんです。拜みたい位ですわ」

「さうかい。何にしても雨のひっそりしてゐるのは陰氣でよくないから、今夜は、陽氣に驅かうぢや

### ないか

政太郎は酒の仕度をさせ、やりてや、仲の良い朋輩花魁數名を呼んで、小宴を開いた。

(何といふ物の判つた、粹な遊びをする人だらうか)

高尾は、政太郎の情が嬉しくて、涙ぐむのだつた。

時刻前に酒をやめて、部屋へ入つたが、雨の音はいよゝ激しくなつた。

「雨の晩は、氣が滅入つて、何だか死んでゆきたいやうな氣持がします、花魁になつてから、そんな心持がいよゝ極端になりましたわ」

「さうだらうね、こんな稼業をしてゐると、喜怒哀樂が極端になる



のかも知れない」

雨に、風が加はつてきた。電燈が明滅する。

「梅雨が上つたといふのに、何といふ天気なんですか」

福島が窓邊に凭つて、街路を眺めた。窓ガラスを鏡のやうに、雨が流れてゐる。遊廓の終夜燈が、雨の中に煙つてゐた。

「ね、あたしの事どう思つてゐて下さる？」

「出来ることなら、賣物買物の立場から一歩進んで、夫婦になりたい心で一杯だが、私は、貧乏な鼻緒職人だ、馴染客の多いお前には不足だらうと思つて、通つて來るだけで、諦めてゐるんだよ」

つて下さるの……」

福島は、政太郎の腕にくづれるやうにしがみ付いて、嬉し涙にさきくれた。

貯金で落籍

「こんな女を、それ程までに思つて下さるのなら、私は、どんなにも務めます」

と、云ふ。政太郎は

「二人が一緒になつたら、浪花町の紺屋高尾みたいだぞ、はハハ」と笑つた。

「高尾のやうな、立派な花魁でなくつて、お氣の毒ね、ははハ」福島も、追従笑ひをする。政太郎は、眞鍮になつて乗出した。

「前借はどの位残つてゐるんだい。つまり、いくらあれば自由な身になれるのかね」

「さうね、もう大部分は辨済した



から、二、三百も残つてゐるか知ら——」

「え、その位だと思ひますけれど……」

「よし、その金は明日圓けるぞ、残存はないね」

「まあ勿體ない。私に異存なんてあるのですか」

福島は喜ぶ。政太郎も

「やれ、これで人間らしい氣持になれた、いよく自分の女と定つて見ると、ますます美しいわはハハ」

と、浮き／＼して來る。雨はいよいよ激しく、窓を叩いてゐる。二人は、一應もせずに、楽しい痴話に耽つて、夜を明した。

福島と別れて、家へ歸つた政太郎は、鼻緒職人の顔で、五圓三圓と書へた貯金通帳を出して見た。

「二百八十七圓か、これだけあれば大丈夫だらう」

早速郵便局へ行つて、携戻しを受け、夜になるのを待つて、遊廓へ行つた。福島は包み隠せぬ喜びを面に

「まあ、こんなに早く——」

と出迎へる。政太郎は携戻して來た金を、福島の手にシツカリ握らせて

「さあ、今夜から自由になるんだ、金は持つて來たぞ」

「……」

黙つて見上げた福島の瞳は、感謝の涙で、光つてゐた。

樓主の室を訪れて、福島落籍の話をすると、樓主も大喜び

「二百七、八十圓は残つてゐるの

ですが、めでたい福島の門出だ、二百五十圓カツキリでよろしうございます」

「有難う存じます。いろ／＼御世話さまで……」

「福島は遊女には珍しい程、氣質の優しい、正直な女です。未永く可愛がつてやつて下さい」

樓主の言葉に、名残りを惜しみつゝ政太郎は福島の手を取つて廊の灯を後にした。

易者の言葉

福島は、本名を美奈子に還つて、鼻緒職人政太郎の妻となつたが、サア、楽しい新世帯の夢から覺めて見ると、夫婦共いやな事ばかりだつた。



美奈子に就しては、街の人々が「あの女は女職上りだよ、大した女ぢやないか」

と、寄ると憐れと悪い噂に花を咲かせるし、政太郎の房は政太郎の方で

「女職に眼が眩むやうな男とは取引は出来ぬ。今にロハな事はしでかさぬから……」

と、得意先で鐵つくを食つてしまひ、商賣が上つたりになつてしまつた

「名古屋にだけ陽が照る譯ではあるまいし、大阪だつて神戸だつて働く所はいくらでもあるんだ」

政太郎が名古屋を見捨て、他所の土地へ行かうといふ。美奈子は「どうせ他所の土地へ行くのなら

新規開直しなんだから、新しくやるとすれば大阪より東京の方がいい」

と、東京行を主張した。「何處だつて同じ事だ、東京がいなら東京へ行かう」

政太郎もその氣になつて、夜になると、旅の仕度をするために、夜店へ行つた。トランクや旅行手を買つて、ぶら／＼歸つて来ると

大道易者がゐる。「ねえあんた、見て貰ひませうよ」

「男なんて仕様がないう、當るものかい」

「當らない事もあるけれど、當る時もあるわ、いゝから見て貰ひませうよ、サブ、あんたから見て貰

ひなさい」

「仕様がないうよ、全く——」  
不承不承で手を出すと、大道易者は尤もらしく、天眼鏡をあてた

「なるほど、旅に行かつしやるのぢやない」

「何を云ふんだい、トランクや旅行手を買つて来れば、旅立つに定つてゐるよ」

「へへへ、旦那は男の房もお知りですか」

「チエツ、笑はずない」  
「然し、旅は西の房、つまり關西から九州の方面はよろしいが、關東から東京、海森方面は凶になつとりますな、へい」

「ふむ、大阪、神戸の房が東京よりは良いかね」

「左様です、この旅がハッキリと出てゐますから西南方言で……」

「あゝか、ふーむ」



政太郎が感心すると、美奈子が「あんた、行きませうよ」

と、政太郎の手を引張つた。讀者の書しき

「美奈子、東京は凶ださうだぜ」

「男なんて當るもんですか、さあ駭りませう」

### 妻は不満

政太郎は、男者の言葉に氣にかけてゐるが、美奈子に念立られると、不安な氣持を抑へて、名古屋を後に、上京した。

東京に着いた二人は、僅かな知人を頼つて、千住町に一家を構へたが、東京は相變らずの不景氣だつた。

異結職人としては、相當の腕前を持つてゐる政太郎も、知人の少ない土地へ来ては、どうにも仕様がないう。

張詰めた氣持でゐながら、ぶら

ぶらしてゐる中に、名古屋を出る時

(まさかの時に——)  
と用意した金も、何時しか使ひ果してしまひ、明日の生活にも困るやうになつた。

美奈子は

「こんな生活を續けてゐても、いよく苦しくなるばかりだから、あなたに代つて、妾が働くことにませう」

と云ふ。一應きくりとした政太郎も、現在の苦境を思ひ合せると、いやともいへず

「お前に苦勞かけてすまないが、働きたいと思つたら、それもいゝだらう」

と、承諾を與へた。



■ 讀者の書しき

「心配する事はありませんよ、今日の社会は、女が働くやうに出来てゐるのですから……」

美奈子は、鬼の首でも取つたやうな氣持で、踏む足も軽く働く口を探しに出かけた。花魁上りの彼女には、到底固い仕事はできないので、働くとするは、飲食店の女中に定つてゐるやうなものだが、飲食店の女中なら、苦勞なく働く口がある。

千住の町を一廻りした美奈子は「何時からでもどうぞー」といふやうな店を、七八軒探してきたが、政太郎とも相談の末「小料理屋の女中は困るが、カフェーのウエイトレスなら、現代向きでいゝだらう」

ともないわよ」  
「そんな氣持があつたら、みつともない眞似をさせなければいゝだらう、この、淫、淫賣婦め！」  
「あれーッ」

政太郎の手が、美奈子の髪にかかつた。ぐいつと引張ると、髪は帯のやうに延びて美奈子は悲鳴を揚げた。  
「畜生、これでもかッ、こん畜生！」  
「あれッ、痛いよ、お前さん、もう神妙にするから、堪忍してお呉れよ、ね」  
「……」

打つて、打つて、自分の身體が寝れると、政太郎はふら／＼と崩れるやうに、坐つてしまつた。

■ 讀者の書しき

と、カフェー銀液に働くことにした。

花魁上りと云へば、如何に實直な女でも、男にかけては、海千山千である。美奈子は懸命になつてチップを稼いだ。相當以上に収入があつたし、政太郎は女給の亭主にをさまつて、のう／＼と過すことが出来た。

従つて、政太郎は妻の前に、頭が上らず  
「お前にだけ働かして、本當にすまない。自分の意氣地なさが情なくなるよ」  
と、口癖のやうにいつてみたが美奈子は夫のからした態度が、不満だつた。

「お前さん、堪忍して下さいるんですわ」  
美奈子は、政太郎に虐待された事が、たまらなく怒り相だつた。



「お前さんの何處に、今のやうな堪忍なものが、潜んでゐるんですわ」

■ 夫婦喧嘩

或る夜、美奈子が、カフェーから歸つて来ると、既に午前二時を過ぎてゐたので、政太郎が美奈子に食つてかゝつた。

「お前は普通の女給ではない特だ立派な亭主のある身體なんだぞ」  
「働つてゐますよ。亭主のある身體になつたのを、今では後悔してゐるんです」  
「なにッ」  
「あら、何をするのよ」

美奈子は、立上つて逃げ廻つた。政太郎は嫉妬に眼を怒らせながら追つて来る。  
「止しなさいッたら……。昨日や今日の夫婦ぢやあるまいし、みつ

美奈子は、惚れ／＼とした眼で政太郎の顔を見詰めた。政太郎はまだ、むしやくしやしてゐた。  
「ど、何處へ行つて来やがつたんだ、こんなに遅くまで……」  
「妾……」

ヂツと眺めた美奈子の瞳に又もや浮氣な、眼敵なものが、溢れて来た。  
「妾ね、アパートへ行つて来たのお客さんを送つて——」  
「えッ、そ、そのお客といふのはお前の何になるんだ、バトロンかそれとも情夫なのかッ」  
政太郎は、美奈子をおさへつけで、怒鳴つた。



夫は刑務所へ

「そ、その男は、何處の何といふ男だ、名前を云へ、名前を——」  
政太郎が、嫉妬にかられてくるのを、美奈子は、心地よげに眺めてゐるが、性急に詰問されると、持前の態度が、ぐんと突き上げて来た。

「野川のアパートに居る野川といふ好男子よ、妾のアミーさ」  
「アミー？」

「あなたには、そんなハイカラな言葉は知らないわよ、妾のいゝ人なんだから、よく覚えて置いて頂戴！」

「なにッ、それは眞實か」  
「あの人に聞いて貰ふよふんだ」

「よし、畜生！」

政太郎は血相變へて、家を飛び出した。

「あら、あの人は……」

美奈子は、飛んでもない事を云つてしまつたと後悔したかもうおそい。

嫉妬に狂つた政太郎は、アパートを尋ね、尋ねて、到々鎌倉を捜し當てた。

「キ、キミ、銀波といふカフェー知つてゐるだらう」

「知つてゐる、よく飲みに行くがそれがどうした！」

「チ、畜生、美奈子と何をしてゐるッ、この野郎、俺は何も彼も知つてゐるぞ、美奈子と何をしやがつたんだ！」

「その女は、銀波の女給ぢやないか、女給なんぞにかゝり合はない、そんな用なら早く歸れッ、何だ、この夜更けに」

「違ふ、キミは嘘を云つてゐるんだ、毎晩々々美奈子をアパートへ連れ込んで、畜生、何をしてゐやがつたんだ。俺は美奈子の亭主なんだ！」

「判らない男だな、俺はあんな女は大嫌ひなんだよ、男の嫉妬は見苦しいから、止し給へ、止し給へ」

「馬鹿、キミは、これ程云つてもしらを切る氣か、も、もう、我慢出来ねえ」

「アッ、何をやるんだ！」  
「何も無いから、畜生！」

政太郎は、傍にあつたビール瓶

人情裁判

控訴院の法廷

赫々と、強い夏の陽光が、法廷に射込んでゐた。機事が公訴事實の陳述をして、嚴かな態度で、著席すると、人情裁判長の曇高の小中裁判長は、慈愛に満ちた視線を被告席に首垂れてゐる、中年の女に注いだ。

「これからお前の犯した強盗殺人

人情裁判

は、傷害罪として投獄されたが、夫を刑務所に送られた美奈子は、「矢張り、男は當るものだ」と、遊説してゐた。

罪の審理に入るのだから今機事がんが申された事實に相違の點はないか、あつたら違ふなく、云つて見るがいゝ、どうだね」

「形に、違つてゐる點はございませんが……」

女は泣いてゐた、千葉縣下で強盗殺人の大罪を犯し、控訴して来た官川いね子と云ふ三十四歳の女「一割の千葉地裁控訴所では懲役

三年六月の判決を受けてゐるやうだが、控訴したのはどういふ譯だね」

「はい。それには不服があつたからです。私は夫と相談して、泥棒を働きましたのに、夫が軽く、私が重く判決されました。夫は窃盗罪だけで懲役一年の判決を受け、直ぐに、服罪したのであります。

夫の寛大な處分に反しまして、私の判決は、強盗殺人といふ恐ろしい罪名で、懲役三年六月なんです。夫婦で泥棒して、私だけが重く罰せられるといふ事があるでせうか法律はもつとく神聖な、厳正公平なものとして居ります。この判決では裁判所を信頼することが出来ませんでした」



いね子は、涙の眼を袖でおさへた。

小中裁判長は、いね子の獄行とすでに服罪してゐる夫の獄行とが相違し、一方は窃盗罪であり、他方は強盗傷人といふ重い罪科があるといふ點を優しく説明し

「そんな譯だから、夫に對しては窃盗としての判決が下り、お前には強盗傷人としての判決が下つたものである」

と、云ひ聞かせた。

始めて、それと悟つたいね子は「女心とは云ひながら、お上を恨んだりいたしまして申謝ありませんでした」

と、肩をふるはせて泣く。

風のない法廷は、いよ／＼暑く

なつて来た。

### 失業と出産

いね子は、夫の官川と七年前に結婚し、今日では三人の子供の母親である。

結婚して、二、三年の間と云ふものは、將來に對する希望はあつたし、官川も順調だつたので

(自分は本當に幸福だ、結婚して初めて、女の幸福といふものを知つた)

と、夢のやうな、楽しい生活を送つて来たが、子供が二人になると突然官川が失業してしまつた。

官川の失業については、いろいろ事情があつたのだが、僅かな涙で、會社を去つた官川は、その

時から悲劇への路へ出發したのである。

生活は日一日と苦しくなつて来るし、處所が火の車になつて来る



と、妻が悲鳴を揚げ、夫に怨嗟の叫びを浴びせかける。どんなに愛

し合つた女にだつて、經濟的苦痛を與へたら、二人の生活は減茶減茶になる。男子たるもの、必ずや女性に對して、經濟的苦痛を與へてはならぬ。

「あなた、米屋や酒屋をどうする氣なんです。食べないで居るのですか、世間體が悪くて、外出も出来ませんよ」

いね子が、ぶん／＼云ひ出すと失禮して、チリ／＼してゐる時だから、カチンと来た。

「處所を切替すのは、女房の役目だ、ある金で、右から左へ支拂ふ位なら三ツ子にだつて出来る、なるところを、どうかこうかやりくのが、女房の勤めぢやないか、何をブツ／＼云やがるんだ、畜生

め」

「まあ、何て事を云ふんです一文も稼がず、無駄飯ばかり食つて、ゴロ／＼してゐる癖に——」

「叱かしたな、西洋豚ッ！」

「畜生、のらくら亭主め」

文字通り、擗み合の喧嘩となり實之が原因で、夫婦仲が悪くなつた。

處が、こんな境遇に關係なく、い

ね子のお腹が大きくなつて来た。明日の生活に困つてゐるのに、又復子供が生れるのだ。

夫の官川は

「だらしない女だ、こんな時紙姫する奴があるか」

と、カン／＼に怒り、

「紙姫させたのは誰ですよ」

と、いね子は、官川に食つてかゝる、夫婦間の風雲いよ／＼急となつた。

### 夫婦の相談

いね子のお腹が一日々々大きくなつて来るに従ひ、官川との仲はいよ／＼悪くなつたが、今更どうなるものでもない。

十月十日の月満ちて、いね子は玉のやうな男の子を生む。いね子は産後の肥立ちもよく、母子共に健全である。

出産の喜びを他所に、生活はますます窮迫して来る。官川は苛々して、その日／＼を送つてゐたがいね子は、産褥をはなれると直ぐから、子供達のため、自分達が生



きて行くために、買かねばならなかつた。

就寝のはげしい折柄、乳呑児を抱へた三十過ぎた女を、使つてくれる所はない。いね子も官川と同じやうに、働くところがないのである。

然し、夫婦は生きなければならぬ。三人の子供達は育てなければならぬ。

或る夜、感傷な舞をした官川と情長しきつたいいね子とが、舞を見合せた。

「一杯やらうか、久し振に——」

「えッ、お酒を……」

意外な官川の言葉に、いね子はぎくりとした。

「はは、。吃驚したのか、素直

では話にくい用事があるんだ」

「まさか、お前さんは——」

いね子の聲は、スツカリおびえ



きつて、鼻へてみた。官川の眼がキラ／＼と光つた。

「どうした？いね子」

「お前さん、まさか死ぬ相談ぢやないのでせうね、一家心中の相談ぢやないのですか、死ぬ話はお断りですよ、心中は駄です」

「シッ、いね子！」

「お、お前さん」

「違ふよ、氣を静めてくれ、死ぬ話ぢやないのだから……」

「ぢや、ぢやあどんな話なんでせう、救へて下さい、早く——」

「お前は興奮してゐる、俺の話は大切な相談なんだ、ユツクリ話したいから、まあ、酒にしてくれ」

「酒と云つたつて、そんな物はありませんよ」

「二、三日中に金は出来る、借りて来い、借りて——」

「はは」

意味あり氣な夫の言葉、いね子は云ひやうのない不安にかりたてられながら、酒屋へ行き、幾度も幾度も、頭を下げて、正宗の二合瓶を借りて来た。

官川は、いね子の酌で、冷酒で飲んでみたが、酔ひが廻つて来て眼の縁がはんりの紅らんで来ると「いね子、此方へ来てくれ」と、彼女の手を取つて、ぐいつと引寄せた。

### 大膽な泥棒

官川は酒の勢ひを借りて云ふ。「こんな生活をしてゐたのでは、親子諸共餓死するやうなものだ。何も餓死するのを待つてゐること

はない。そこで俺は、考へたんだよ」

「まあ、あたしはお前さんがそんな氣になつてくれて、こんな嬉しいことはありません」

「いね子、お前は泥棒するだけの度胸があるか」

「えつ、ど、泥棒——」

「さうだ、死ぬのだと思へば、泥棒位は、何でもないうよ、お前はいやか」

「お前さん——」

「いやだと云ふのか」

「あたしは嬉しいよ、こんなクサクサした生活をしてゐるよりは、泥棒でも、人殺しでも、やれるものならやりたいと思つてゐたんだよ、お前さんが、そんな心になつ

てくれて、あたしは、本當に嬉しい、嬉しい」

「ぢや、やるんだね」



「え、やりますとも……」

「さうか、それでホツとしたよ、さあ、注いでくれ」

「あいよ」



夫婦はスツカリ融合してしまつて、いゝ機嫌に酔つて就寝する。翌日になると、夫婦相談づくで支度を整へ、夜になるのを待つて、泥棒に出かけた。

最初の間は店先にある品物や物置にある物を盗んでみたが、日が暮つに繼つて、夫婦の行動が大膽になつた。

「おい、いね子。こんな事では商賣にならないよ。どうせ捕つてしまへば、刑務所行と定つてゐるんだ、もつと大きく稼がらうぢやないか、どうだね」

「よござんすよ、何の誰それと、番附にあるやうな金持の家から、何萬何千と、仕事をしようぢやありませんか」

「へつへつこの干葉在にゐてはそんな甘い汁も吸へないが、兎に角、金のありさうな家へ、乗り込むことにしよう」

夫婦の氣持が一致する。官川にしろ、いね子にしろ、十分に腕に覚えはあつたので、凄じい鼻息だつた。官川がチーツと考へた末

「サア、第一番は何處にしたものかな。小手馴への積りで、なるたけ乗りに込める家がいゝぜ」

「孫婆のお婆さんの家はどうですか、お婆さん一人で、小金を蓄めてゐるといふ話ぢやありませんかあの家なら、勝手は押つてゐるし……」

「よし来た！あの家にしよう」官川は勢ひ込んで、立上つた。

午前二時

遠くに聞える野犬の叫びも物凄く、夜は、シン／＼と更けてゐた。

干葉在のこの村で、雜貨商を営んで、何不自由なく暮してゐる儲けまゝ宅へ、目星をつけて進み行く夫婦は、もうすつかり、泥棒稼業に慣れてゐたので、夜更の村道をヒタ／＼と進んでゐた。

暗々と照り渡る月を見上げて、いね子が云つた。

「お前さん、良い月夜だが、仕事に月夜は、一寸察物だね」

「さうよ、俺もさつきから考へてたところだ、馬鹿に照つてゐやがるし、まるで盗みたいぢやないか、見ろ、何處も彼處も、よく見えて

ゐるぜ」

「月夜の晩に、泥棒するのは、爺人だけしかないね、あたしは何だか、今夜の仕事は、氣がすままないよ」

「なにを云ひやがるんだ、昨日や今日の、泥棒ぢやあるまいし、出鼻を挫くやうな事を云ふなよ」

「だつてね、今夜は本當に、氣が進まないのだよ」

「チツ、おめえは時々、重な事を云ひ出すんで、世話が焼けて不可ねえ、妻一人の家だ、何の事も無からうぢやないか」

夫の言葉、いね子は黙々としてついて行つたが、どうも、何時もの元氣がなかつた。

孫婆の家へ着いたのが、午前二時



申前で、どの家も、ぐつすり入つてゐる。

「へつへ、シーンとしてゐやがるぢやないか、これぢや丸ツ切り自

分の家へ入ると同じだ」

「お前さん、表の扉は駄目だよ、固く鍵が下りてゐるよ」

「泥棒サマの入口は、裏所か便所か、汲取口と定まつてゐらあな、玄關から押入らうなんて、おめえはどうかしてゐるぜ、おい、いね子しつかり頼むぜ」

裏手へ廻つて、裏所口をガタビシヤヤると、相當古い家と見えて錠前がゆるんでゐる。ガラリと開いた。

「へつへ、これだ、サアいね子、入るだ、入るんだよ」

「押つてゐるよ、この家はね、お實を探すよりは、店の扉で稼いだ方がいゝよ、賣溜でも品物でも手當り次第に持つて来てしまへばいいのさ」

「そら、さうだよ、第一その方が安全だよ」



夫婦の者は、蔵所の戸を叩いて置いて、足音を忍ばせながら店の間へ進んだ、いゝ具合に老婆は眠つてゐる。かすかにいびきの音が漏れてゐるし、好都合なことには天の助けか、窓から差込む月明りで、屋内はまる見えだつた。

心臓は強い

棺の蓋を開き、蔵主さん方へ、まゝと忍び入つた宮川夫婦は窓からさし込む月光を幸ひに、金品を物色した。

寶篋金を探すと、竹筒の中に三十八錠入つてゐた。これを奪取したいわ子が驚いた。「お前さん、しみつたれてゐるぢやないか、奪取つた金が三十八錠

しか入つてゐないよ」「チエツ、驚いたものだね、仕方がないから、店の品物でも持つて行かう」

「あゝよ」すつかり意氣投合してゐる夫婦は、目撃の品物を物色したが、何しろ、田舎の蔵主屋のことだし、金目のものはない。

マッチ三程、バット二個、タワシ六個、照紙、帯一本を掻き集めて「いね子、もう引揚げやうぞ、探したつて、無駄だ」

「口惜しいわ、ワザ／＼目星をつけて来て、現金三十八錠に、タワシ、照紙と来たんぢや、石川五右衛門さまが、噴き出すよ」「シツ、ぶつ／＼云つてゐる時ち

やないよ、夜が明けたら大變だ、早くしろ、早く……」

「あゝいゝよ、お前さん先にお逃げな、あたしは足が早いから……」「さうか、ちや早く出て来るんだ、いゝか」

「靴つてゐるよ」官川は、裏口から出て行く、いね子は、後に残つて

(もう少し、何かありさうなものだが……)

と、店の間から、きん婆さんの履室を覗いてゐた。

「誰だい、其處にゐるのは……」「えッ」

「誰だよ」きん婆さんが、ムク／＼と起上つた。いね子は、ハツとして、物

路に、姿を隠したが、きん婆さんがのこ／＼出て来たので、もう隠れ命である。

「ど、泥棒ッ」

遂に、奪取された。きん婆さんが眼を刺して叫ぶ。いね子は、

「えゝ、この婆め——」

と、俄然、物影から飛出すと、きん婆さんに飛掛かつた。

「あれッ、泥棒だ、だ、誰か助けて呉れ」

「泥棒も、助けて呉れもあるものか、この糞婆め」

恐ろしい女があつたもので、悲鳴を掲げるきん婆さんの白髪を引摺んで、ぐい／＼引越し、きん婆さんがクタク／＼になつてしまふと「驚愕へ訴へると、お前さんの生

命はないよ、いゝかお婆さん」

犯人は夫婦者

「泥棒——ッ」



鋭い老婆の悲鳴が、夜明け前の

戸外へ流れて来た。官川は氣が氣でない。

(いね子め、へまな眞似をしやがつたな……)

裏口へ飛んで行くと、出合頭にいね子にドンと、ぶつかつた。

「どうしたんだ」

「どうもかうもないよ、早く、早く——」

いね子が、官川の手を引張つて駆け出す。老婆が血塗唇になつて追つて来た。

「ど、泥棒——ッ」

老婆は金切聲を上げたが、夫婦はもう、その附近にはゐなかつた草鞋天の如く、街道を眞つ直ぐ突走つてゐるのだ。

「大變だ、誰か助けてくれ！泥棒







# 國民新聞社發行圖書

東京市京橋區銀座西七丁目  
振替口座東京三六六三番

誰にもわかる **人相と手相**

四六判美裝 定價十錢 (送料二錢)  
人相手相は運命を豫知するに比較的根據があり判断が容易である。本書は相の大家田畑大氏が三十年の實験を基礎として最も平易に説いたもの。一讀直ちに應用ができる。

入學試験問題及答案集

四六倍判 定價二十錢 (送料二錢)

東京府市官立中等學校三十五校の十一年度入學試験問題と模範答案及び受験の参考事項、合格のコツなどが簡潔に記してある。受験児童や父兄になくてならぬ参考書である。

衆議院議員名鑑

四六判美本 定價十錢 (送料二錢)

昭和十一年二月に行はれた衆議院に當選せる新代議士の寫眞、政派別、當選回数、年齢、職業、經歷等が一目瞭然、末尾には落選者の一覽表が添付してある。

東京近郊の行樂

四六判美本 定價十五錢 (送料二錢)

春の花、夏の綠蔭、秋の紅葉、四季の温泉にハイキングに適地として何處を遊ぶべきか、之等の希望に對しその行先と行程を説明せる日帰り行樂の上き案内書である。

腕一本開運術

四六判百八十頁 定價六十錢 (送料不要)

本書は前本社編輯部次長鈴木萬造氏の著、腕一本、歴一本の熱と力を傾けて、自己の運命を開拓するにはどうすればよいか、人世修業の手續、この手を詳述したものである。

法然上人

四六判美裝 定價十錢 (送料二錢)

本社主催佛敎講演會に於ける淨土宗の權威者并智海會長、中村辨康師、佐山學順師、石井教道師等の講演を収録したもので淨土宗早わかりと云ふべきものである。

卸賣市場の常識

四六判美本 定價十錢 (送料二錢)

中央卸賣市場が開場された當時、が社は卸賣市場に関する座談會を主催した。本書はその機構及び利用法等に就て權威者の腹藏なき座談の内容である。一讀利用せられよう。

裁かれる人生

四六判美本 定價十錢 (送料二錢)

近代文化の發達に伴ひ犯罪の内容が著しく複雑化して來た。之等犯罪中社會と關係の深い時に懲罰多きもの數篇を選びて讀物としたものである。

昭和十一年九月十五日印刷  
昭和十一年九月十九日發行

定價金十錢

版權  
所有

編者代表 楓 井 金 之 助

東京市京橋區銀座西七丁目二番地  
國民新聞社代表者

發行者 田 中 齊

發行所

國民新聞社

東京市京橋區銀座西七丁目二番地  
電話代表銀座五五五一番(10)  
振替東京三六六三番



第四卷十號





3  
7

170